

斉藤齋藤『人の道 死ぬと町』を読む 田中拓也

「死刑制度」「東日本大震災」「原発」「少子化」……。これらの言葉は現代社会の重大なキーワードと言えるだろう。そして、これらの問題を自己の問題意識として、深く考察し、歌人として真剣に歌っている歌人はどれほどいるだろう。斉藤齋藤の十二年ぶりの歌集は重厚な一冊である。

- ・ 洋風に鳩サブレ焼け、かつてなく薄汚れたる平和の祈り
 - ・ 死ぬことと三十年後にそなえつつ生きることとはちがうよ
 - ・ 人間をふかく信じるこいびとはぼくを信じる人間をばぶいて
- 編年体で編まれた歌集の二〇〇四年、二〇〇五年の作品より印象深い三首を抄出した。「平和」の危機感の巧みな比喩で詠んだ一首目。「生」と「死」を独自の視点で見つめた二首目。「こいびと」との関係性をシニカルに詠んだ三首目。いずれも、近現代短歌の世界を下敷きとして、独自の作品世界を展開していることに注目したい。
- ・ 人を殺す自由はあると思いたい
 - ・ ことばの上でかまわないから
 - ・ 殺される自由はあると思いたい
- こころのようにほたる降る夜
- 大阪池田小事件と死刑制度をテーマに詠んだ連作で、作者は新聞記事をはじめ様々な「言葉」を引用しつつ、自身の作品世界を生み出している。そこには、「生と死」、「罪と罰」を思索し、苦

しむ作者の葛藤と悩みが赤裸々に描きだされている。

・ 撮ってたらそこまで来てあつという間で死ぬかと思つてほんとうに死ぬ

東日本大震災に取材した一首。発表時、物議を醸した話題作だが、本歌集においては驚くほどこの一首は鮮明な作品となっている。そこには、表現者としてぎりぎりの地帯で言葉を選ぶ作者の苦悩がうかがえる。

・ メルトダウンに最も近いパチンコ屋で浜崎あゆみを2千円打つ

・ 子どもなんて産んでしまえばなんとかするものでしょうとか言

つちやえる世代

本歌集に所収された作品を読みつづ感じたのは、斉藤齋藤の作品を読むことは自分自身の問題意識も鋭く照射するということがある。大阪池田小の事件発生時、私は高校に勤務しており、クラスマッチの日に事件発生を知った。東日本大震災発生時は中学校に勤務し、万葉集の解説をしている時であった。そして、小学校に勤務している今、少子化は学校存続にかかわる死活問題として、真剣に向き合っている。実生活で、それらの問題に向き合うことは、現実的な対応である。だが、短歌の表現者としてそれらの問題と向き合うことは、深化した「魂」の次元の問題として深く突き刺さってきた。

本歌集の巻末の一連は天折の歌人笹井宏之へのオマージュとなつている。その中で作者は自身の短歌観を連作に折り込みつつ展開している。「歌とは、日々の『棺』なのだろう。」という言葉は至言と思う。いわゆる歌集の予定調和をすべて外した分厚い一冊。読むときには「覚悟」が必要な一冊である。